



第 42 回 「読む 打つ 書く」の言葉

三中信宏著、「読む 打つ 書く」（東京大学出版会、2021年6月）は300ページを超える大著です。これには著者の読書（読む）、書評執筆（打つ）、自著執筆（書く）に関する経験、さらにこれらの知的活動の進め方などについての考え方が記されています。著者は文系の職業作家ではなく理系研究者ですが、長年にわたり「読む 打つ 書く」の活動を研究活動と並行して行っています。活動の背景には筆者の専門分野である農学の特徴が浮き出ており、広範囲にわたる理系の読者には必ずしも当てはまるとは限らず、「読む 打つ 書く」に関する農学専門書のような様相、さらには著者の自伝的な様相が表れていますが、その中でも「忘れえぬ言葉」が散見されます。

たとえば、いきなり「まえがき」には「書く」意義が記されています。すなわち、一般に研究者は先達の優れた著書により学んでいるので、その「学恩」を次世代に送ることが務めであること、それには自身の生み出した研究成果をもとに後進に影響を与えられるような専門書を「書く」ことが重要であると主張しています。私はこの主張に共感します。このような専門書は一般的な理系教科書にくらべ読者数は少ないでしょう。しかし、すでに分かっている知識を平易に解説した教科書的な書物以外にこのような専門書を執筆することは重要です。科学は教科書に書いてあることが全てではなく、未知のことが多いということを示唆し、後進に新しい研究の道を開くヒントを提供することはこのような専門書でないとできないことだと思います。そのためには科学先進国で先鞭がつけられずすでに世界的に流行しているような研究を後追いするのではなく、新たな研究を切り開きオンリーワンとして長年にわたる独創研究をしておくことが必須です。その成果をもとに執筆すれば先達に報い、後進に道を示唆することができるでしょう*。

*「忘れえぬ言葉 8」に記した、私の同僚だったある米国人研究者の言葉、「あなたは教育者でもあるので大変だね。論文の成果をまとめて本を書かなくてはならないのだから。」を思い出します。

本文の第1, 2, 3章では各々「読む」、「打つ」、「書く」ことについての方法論を展開しています。一方、第1章の前にある「プレリユード」、各章末にある「インターリユード (1)、(2)」、「ポストリユード」には著者の思いが込められています。たとえば「プレリユード」では「書く」ことについて、「自分が読みたい内容の本を書く」のだそうですが、これには上記の「学恩」に報いたいという著者の願いが込められているようです。

「インターリユード (1)」は「読む」に関する著者の思いです。著者の農学研究分野は従事人口の少ない「非典型的研究分野」なのだそうです。このような小さな分野では先達の残した書物を所属研究機関の「公費」で購入してもらうのは容易ではないことから、「私費」により購入し、仕事に必要なライブラリー構築に励む宿命を負っているということです。これは当人にとって経済的に大きな負担ですが、一旦購入すれば書

面に書き込みをしたりする自由度が与えられるという利点があります。私自身も大学教員だった時代には研究に必要な書物は私費で購入していました。なお、私が現在所属する法人ではこれらを公費で書籍を買うことが比較的容易です。言い換えると、この容易さを獲得するためにこの法人を立ち上げたといっても過言ではありません。非常に恵まれた環境で研究できるようになりました。

「インターリード(2)」も「読む」についての思いですが、上記(1)とは異なり、「読む」ための書物を「買う」ことについて述べてあります。すなわちライブラリー構築のために買うので、買った書物は必ずしも読むだけでなく、いわば「つん読」するのだそうです。要するに「本は読む・読まないに関係なく、ここに“ある”ことに意義がある」のだそうです。ライブラリー構築のためにはこれはもっともな考え方です。ただし、実際に読んでみると「学恩」に報いるための予期せぬ素晴らしいヒントを得ることができそうです。それが読むことのだいご味の一つでしょう。

なお、第3章の後半には文章をたくさん「書く」ために、心理学者ポール J. シルビアの著書から引用された提案が書かれています。それは自分自身のスケジュールを徹底的に管理することだそうです。すなわち「時間確保」、「計画厳守」、「弁解無用」です。ごもっともですね。たとえば論文や書物の執筆の締め切り日よりもずっと前に提出してくる人がいます。「どうしてこのように早く提出できるのだろう。本人は多くの仕事を抱える忙しい人なのに。」と不思議に思うことがありますが、本人には上記のようなスケジュール管理を身につけているのでしょう。うらやましい限りです。そういえば、「大切な仕事はむしろ忙しい人に頼め」とよく言われるのは、「スケジュール管理能力にたけている人に頼め」ということなのでしょうね。反対に広範囲にわたる知識を持ち、頻繁に批評・評論を繰り広げている口達者な人中にちっとも論文や書物を書かない人が散見されます。この人たちはその場では耳触りのよい発言をしながらも、執筆に耐える論理展開がまとまっておらず、また結局スケジュール管理もできません。その結果「学恩」には報うことのできないのです。

「ポストリード」では、著者にとって「読む 打つ 書く」が作る世界は自宅や職場とは異なる「第三の場所」と指摘しています。このような自分だけの場所を持つことは幸せですね。そして最後に理系の研究環境の実情を指摘しています。すなわち現在では理系研究者には原著論文は書いても単著の本に取り組もうという動機が湧きにくいのだそうです。研究費を獲得するためには多くの原著論文を書くことが必要で、単著を執筆しても研究業績として評価されないからでしょう。原著論文を書くことは必要ですが、しかしそれだけでは「学恩」に報いることにはなりません。自身の研究が独創的、先駆的であれば、それを体系化して後進に伝えることが必要であり、その手段が「書く」ことだと言っているのです。